京都教育大学フォーラム２０２０

対面・オンライン授業のハイブリッド化による学びのデザイン
ーコロナ禍社会における教育活動の省察ー

【プログラム】

○ごあいさつ
　太田 耕人（京都教育大学長）

○趣旨説明
　清村 百合子（京都教育大学教授）

○話題提供
　１．黒田 恭史（京都教育大学教授）
　　「教育保障のための情報配信のあり方」

　２．樋口 万太郎（京都教育大学附属桃山小学校教諭）
　　「対面・オンラインのハイブリッド型授業の可能性」

　３．植山 俊宏
　　（教育創生リージョナルセンター機構 教職キャリア高度化センター長）
　　「『先生を“究める”Web講義』動画コンテンツの利活用による教員研修の効果」

○講演
　高橋 純（東京学芸大学准教授）
　「対面・オンラインのハイブリッド化による学びをどうデザインするのか」

○パネルディスカッション
　「対面・オンラインのハイブリッド化による学びの可能性」

主催：京都教育大学（企画・運営：研究推進室）
後援：京都府教育委員会、京都市教育委員会

国立大学法人
京都教育大学
KYOTO UNIVERSITY OF EDUCATION

ごあいさつ

太田　耕人（OTA Kojin）

◆京都教育大学長

京都教育大学フォーラム2020にご参加くださり、ありがとうございます。

「対面・オンライン授業のハイブリッド化による学びのデザイン」が今回のテーマです。このテーマをオンラインでお届けするのは、形式と内容が一致していて、却ってふさわしいようにも感じます。

オンライン授業は、大きく４つの象限に分けられます。「配信」による一方向の伝達か、「コミュニケーション・メディア」による双方向の意思疎通か？受講者が同時に視聴しそのときだけで消えてしまう「ライブ」か、受講者が個別に視聴し一定の期間保存される「録画」か？

デジタル時代の教育として、かつてもてはやされたのは、「ライブ」の「配信」でした。よくデザインされた授業を配信すれば、教室に集まるのとは桁違いの数の学生を教育できます。その分野の第一人者による「ライブ」講義には、世界中の受講生と特別な時間を共有するワクワク感がありました。ただし、情緒的な高揚感は得られても、学習内容が定着するとは限りません。

「録画」を「配信」するオンデマンド型なら、受講生は分からない部分があれば立ち戻り、繰り返し視聴して、理解を深められます。また、対話型の深い学びを目指すなら、双方向のリアルタイム型（「コミュニケーション・メディア」を用いた「ライブ」）を選ぶことになります。いま私たちの念頭にあるのは、この二つの型のオンライン授業です。

オンライン授業では、対話型授業と異なる授業設計（10分×５への分割など）やコンテンツの再構成が求められます。視聴ログの管理、授業・試験の成りすまし防止（生体認証の導入など）も考えねばなりません。オンデマンド型なら、早回し、飛ばし見の防止も必要です。こうした問題のいくつかは、対面授業とのハイブリッド化で対処できるかもしれません。

このフォーラムでは、小中高生向けのYouTube教材が注目を浴びる本学数学科の黒田教授、メディア教育の実践で最先端を行く附属桃山小学校、現職教員研修向けWebコンテンツ制作で評価される教職キャリア高度化センターが、成果を披露申し上げます。その後、教員のICT活用指導能力の向上に取り組まれている、東京学芸大学の高橋純准教授にご講演をいただき、パネルディスカッションで締めくくります。どうか早回しなどされず、最後までご高覧いただければ、たいへんうれしく存じます。

開 催 趣 旨

清村　百合子（KIYOMURA Yuriko）

◆京都教育大学教育学部／教授

小・中学校の音楽科授業を研究対象とし、伝統音楽の授業開発や音楽科における資質・能力の育成を主な研究テーマとしている。編著書に『学校におけるわらべうた教育の再創造』『日本伝統音楽カリキュラムと授業実践-生成の原理による音楽の授業』などがある。日本学校音楽教育実践学会副代表理事。

対面・オンライン授業のハイブリッド化が目指すもの

コロナ禍という想定外の危機的状況は、医療、経済をはじめ私たちの社会生活の様々な局面に多大な困難をもたらし、教育界もその例外ではありません。いま学校現場では多くの教育活動が制限され、授業のあり方も変化を余儀なくされています。

そのような中、2020年教育界で最も注目されたのはICT教育といえるでしょう。コロナ禍以前より、ICT教育に関する議論は盛んに行われてきましたが、2020年春の一斉休校を境に、ICTを活用したオンライン授業は現実のものになりつつあります。しかしながらここでICT教育への加速をただ傍観するのではなく、「学校教育でしかできないことは何か」という教育の原点を踏まえたうえで、これからの教育のあり方を考えていく必要があると考え、「対面・オンライン授業のハイブリッド化」をテーマに設定しました。

附属学校保護者に対する休校中の子どもについての調査報告では、親の不安、また子どもたちの学習支援や友人関係など教育環境構築が課題として示されます。附属桃山小学校の報告では、当事者である子どもたちは「自分のペースで学ぶことができる」などオンライン授業のメリットを実感しつつも対面のリアルなつながりを求めています。「教育は社会的な関係で成立する」ことが子どもたちのつぶやきからみえてきます。一方、教員研修Web講義の報告では、多忙を極める教員の働き方改革に貢献すると同時に、たとえオンラインであっても一方的な講義形式ではない、実感のもてる学びになるよう工夫がなされています。

両者のハイブリッド化を切り口に、「学校教育における先進的取り組みの発信」と「地域の教員研修を牽引する中核組織」という本学が担う社会的役割を踏まえ、新しい時代に対応した教育のあるべき姿を見出す機会となることを期待します。

話 題 提 供

「教育保障のための情報配信のあり方」

黒田　恭史（KURODA Yasufumi）

◆京都教育大学教育学部／教授

専門は、数学教育学。研究テーマは、生理学データを用いた算数・数学教育研究で、学習時の脳活動や視線移動の特徴を解明し、教育研究に活かす取り組みを行っている。

主な著書に、「脳活動の算数・数学教育への応用」、「本当は大切だけど、誰も教えてくれない算数授業５０のこと」、「豚のＰちゃんと３２人の小学生」などがある。

「対面・オンラインのハイブリッド型授業の可能性」

樋口　万太郎（HIGUCHI Mantaro）

◆京都教育大学附属桃山小学校／教諭

1983年大阪府生まれ。教職１６年目「子供に力がつくならなんでもいい！」「自分が嫌だった授業を再生産するな」「笑顔」が教育モットー。

日本数学教育学会（全国幹事）、全国算数授業研究会（幹事）、関西算数授業研究会（会長）、授業力＆学級づくり研究会（副代表）、「小学校算数」(学校図書)編集委員。主な著書に『子どもの問いからはじまる授業!』など多数。

「『先生を“究める”Web講義』動画コンテンツの利活用による教員研修の効果」

植山　俊宏（UEYAMA Toshihiro）

◆京都教育大学教育学部／教授

教職キャリア高度化センター長

本学には1987年赴任。専門は国語科教育。近年は教員研修の支援にも力を注ぐ。Web講義コンテンツの開発を推進している。反転型の教員免許状更新講習や京都府市総合教育センターとの共同開発によるコンテンツを活用したハイブリッド型研修にも深くかかわっている。

講演　「対面・オンラインのハイブリッド化による学びをどうデザインするか」

高橋　純（TAKAHASHI Jun）

◆東京学芸大学教育学部／准教授

教育工学，教育方法学，教育の情報化に関する研究に従事。中央教育審議会臨時委員（初等中等教育分科会），文部科学省「教育の情報化に関する手引」作成検討会委員，文部科学省「教育データの利活用に関する有識者会議」委員，文部科学省「学校業務改善アドバイザー」等を歴任。日本教育工学会理事，日本教育工学協会副会長など。

なぜ対面・オンラインのハイブリッド化による学びが話題であるかといえば，新型コロナウイルス感染症への対応や，GIGAスクール構想によるICT環境の変化があげられるだろう。特に，全ての児童生徒がPCを持つことや，クラウドといった従来のICTと感覚的に異なる機能が活用できることを前提にする必要がある。

そのために，まずは教員が慣れていくことが必要である。あらゆる教員研修や職員会議等において全ての教員がPCを持ち，クラウドで協働作業をしたり，オンラインの教員研修を体験してみる。体験をしてみると，事前に想像していたことと異なる実感を持つだろう。こうした方法による学びや業務遂行は，既に社会では当たり前である。実際に体験してみるとなぜ社会がこのような変化をしているのか，コロナ禍のみならず，少子高齢化，ICT技術の向上などあらゆる事情によるものだと実感として分かってくる。加えて，子供も慣れていく必要がある。

こうした後に訪れるのは，これまでの学び方とは異なった姿であろう。特に，基本的な知識・技能については，学ぶ場所，時間，先生からの自由度が上がったり，短く，何度でも，いつでもどこでも学ぶことができるオンラインが一層活用されていくのではないだろうか。

パネルディスカッション
「対面・オンラインのハイブリッド化による学びの可能性」

「対面・オンラインのハイブリッド化による学びの可能性」をテーマに、話題提供の先生方と高橋先生とでオンライン会議システムを用いてパネルディスカッションを行いました。

今回のコロナ禍においてオンライン教育を導入した学校の実態はさまざまであったといえます。話題提供の附属桃山小学校のように、ICT教育研究に取り組んできた実績をもち、実践のノウハウの蓄積がある学校もあれば、まさに今年度やらざるを得ない状況でオンライン教育に着手した学校もあるでしょう。

前者の学校にとっては、これからはオンライン教育だけでなく、対面とオンラインをどう組み合わせていくか、それぞれのメリット・デメリットを想定したうえで授業をデザインしていく段階に入っているかもしれません。また後者の学校にとっては日々「創意工夫」の連続で、子どもたちの教育環境を最優先に整えるべく、子どもも教員もオンライン教育にチャレンジする段階と言えましょう。パネルディスカッションではこの両者の立場を想定して議論を深めています。

ディスカッションでは「オンデマンド研修のよさ」「オンライン授業への挑戦」「対面・オンラインの組み合わせ方」「ハイブリッド化における協働的な学びとは」を主なトピックとして議論を繰り広げています。

新しいことに取り組んでいくときには必ず困難や抵抗が伴います。そんなときに大事になるのが「教師のマインド改革」であるとパネルディスカッションの中でも話題になりました。今回のコロナ禍を「教育変革をもたらすチャンス」ととらえ、さまざまな取り組みに挑戦していく精神を培っていきたいものです。